

御燈籠連鈎

御燈籠油盞

燈籠銘。順庵木貞幹撰如左。

大哉神德。惟厚群生。至哉坤元。實配令名。赫々懿親。鎮

茲奧區。盤山基固。豬湖澤瀉。輪奐靈祠。烟燭香火。華籠蘭

膏。輝右映左。精誠感格。幽明貫通。於昭有光。永照無窮。

一聯フツ特通り、短冊板ニ彫ル。扉ニハ如右。

金燈籠壹對

奉供

土津靈社神祠。以揭無盡之神光云。

元祿四年歲次辛未秋八月十有八日

正四位下左近衛權中將官原朝臣謹誌

雄 劔

吉房所造

一鞘

奉納

土津靈社神庫

元祿四年歲次辛未秋八月十有八日

正四位下左近衛權中將官原朝臣

一、和山居約

一隊東山歲月遙。衡門畫掩艸蕭々。從來不負蒼生望。自分踈慵違聖朝。

一、中秋對陰雲述懷

思ひとる心のくまもはてぞなき名たかき月もくもる習を時こそあれ雲の衣のうらみより秋を思はぬ月ぞあやなき宵のほどとばかり月の影ほのめきて、又くもり侍ければ。

月こよひくもりもはてよ中々にまだしと思へば村雲の空天津風こよひの月にうき雲をいは戸の關に吹とどめてよひたふるの浮名はたゞじ雲間より玉ゆりもれし月の光によしやさは憂になれたる山すみは曇る今夜の月も恨みじさりともと雲間の月を松の戸にいたく今夜の秋も更ぬるよしさらば重なる秋の今宵をや今宵になして松の戸の月一、小瀬助信・室新助仲秋の作

小瀬又四郎・室新助今夜の作御尋如左。

中秋書懷

瀬 助 信

雨歇風微宇宙寬。嫦娥負約思漫々。陰雲深處光纒現。爽氣浮時影暗寒。竹葉雖□催嘯詠。燈華難復罄交歡。殷勸此夕

不須睡。長漏期晴幾倚欄。

同

室 直 清

雨散前林烟未收。清風白露思悠々。雲瑞仙鏡有時見。池底嫦娥何處求。塞雁難傳千里信。候蟲空報四隣秋。今宵料得同寅會。一座笑談在北州。

一、十六夜清明

武藏野や十六夜の月のさやけさに昨日の雲を猶ぞ恨むる懷舊の心を

佛は隔てぬものをとしつきの思ひもしらで移りゆくらん

月前雁

風さそふ空よりをちにとぶ雁の聲すみわたる秋の夜の月一、初雁を聞く

閏八月朔。初聞鴈聲

行雲の衣手さむみ雁がねのおとづれ初めしゆぶぐれの空一、高野山三昧院の什物

高野山金剛三昧院什物短冊百二拾枚の事、微妙公三百石の寺領を以て御所望被遊候得共、其御御朱印奉願不指上之候。其後中將様御所望の時分も不指上之處、頃年寺内及大

破候間、此度指上之金四百枚拜領、寺中修理等仕度旨、金剛院此儀に付罷下候由、後藤理兵衛に付て相願候。多賀信濃言上の處、可爲名物の間彌僉議可仕旨被仰出候。先達て理兵衛取次頼候節は、金子五千兩の由申候の處、取次難仕候旨斷申聞候へば、減少して如右と云。

一、偶 成

夕ぐれの哀れに堪し秋の袖を夜深き雨にそぼちてぞぬる誰が袖を又濡せとや秋の雨の夜深き窓におとづれて行く一、田中一閑羈旅の歌

七日。田中一閑より此度旅行の口號、書付て投贈。

君の仰ごとありて、陸奥に暫のほどの事にてまかりける。早門出せしに。

しばしとて別れし旅もつらきとはけさ立袖の涙にぞしる九とせになりしみどり子、道までおくり侍りて行か歸かとして、なみだぐみてものいはいはで、まばゆきやうになん見えければ。

暫くの旅とぞつくる言の葉も涙にくれてあやも知られず左の方に日光山見えけり。東照宮たゞせ給ふなれば、